

生存科学研究 ニューズ

VOL. 6. NO. 2. 1991. 3. 10. 発行

発行：財団法人 生存科学研究所

〒 東京都 中央区 銀座 4-5-1

聖書館ビル 303

電話 03-3563-3518

第1回生存科学シンポジウム 『生存科学における発展』

平成3年1月20日(日)午前10時より、千代田区紀尾井町の上智大学10号館講堂において、第1回生存科学シンポジウムが開催された。これは公益信託武見記念生存科学研究基金と財団法人生存科学研究所との共催で、国際シンポジウム以外では初めて東京で開催した本格的な公開のシンポジウムである。この生存科学シンポジウムは、今後は東京と、出来れば関西で、毎年定期的で開催される予定である。

午前は、慶応義塾大学渡辺格名誉教授の「生命科学の将来像」、上智大学柳暉睦男教授の「宗教と生存科学」と題する特別講演2題が行われ、午後はそれぞれ、図書館情報大学藤川正信学長、社会保険中央総合病院小児科横田俊一郎部長、星薬科大学粕谷豊学長、三井業際研究所向山定孝常任委員の諸氏が座長となり、「生存の哲理」「健康と家庭」「医薬問題」「産業環境と生存」の4分科会が行われ、最後に再び全員が一堂に会し、産業医科大学土屋健三郎学長を座長として総合討論が行われた。

詳細は研究誌『生存科学』に掲載されるが、簡単な概要を以下に紹介する。

* * * *
特別講演「生命科学の将来像」の渡辺講師は、日本の分子生物学のパイオニア、日本学術会議副会長、そして生存科学研究所の顧問でもある。

講演は、従来と全く逆なユニークな発想から生命科学の将来を考えるもので、講師は、物質とエネルギーの世界から生命の世界が生れ、生命の世界の中の一番最近の段階で人間が生れ、そこに精神(心)の世界が生れてきたが、これはいずれもエントロピーの増大という過程での出来事であり、上を向いて進んできたのではなく、下を向いて進んでいるのであることを強調されている。そして自然科学の思考もこの発想にそってなされるべきであるとし、地球上の生命現象の根源はDNAにあるが、今までの自然科学は、人間の視点から生命を眺め、それがDNAのどの機能によるかを分析しようとしてきた。その発想は逆転させるべきで、DNAのあらゆる情報をくま無く調べ、それから人間を覗いていかなければならない。それは未知のDNA機能を発見することであり、生命の秘められた可能性を発見し、新しい世界を作ることになる。これが生命科学の将来像であり、そうした発想から、同じDNAを持ち、まさに同胞である地球上の全生命体の生存を考えなければならない、と説かれた。

* * * *

特別講演「宗教と生存科学」の柳瀬講師は、物理学を専攻され、さらに哲学、神学を修め、上智大学の物理学教授、同大学生命科学研究所所長、同大学学長を歴任、イエズス会の司祭でもあり、生存科学研究所が開催した「科学と人間」会議のメンバーでもある。

講師は、武見太郎先生の講演と研究誌「生存科学」のなかの論文を引用しながら、科学技術も倫理的宗教的要素を無視できない段階になり、心の問題を考えざるをえなくなったこと、人間だけではなく人間を含めた全生態系の生存を考えることが必要であることから、ライフサイエンスよりさらに広い意味をもつ生存科学という包括的概念が必要であるとし、生存科学は未来の価値体系を問題にするという考えに賛成。この考え方を土台として、宗教と生存科学に言及した。

すなわち、DNAを基本として人間の精神活動までを含む全てを探究するという考え方は良くわかる生物観であるが、生命現象には物理科学的現象だけで尽くせないものがある。生物学的な個々の現象を理解するには目的性を考える必要があり、誰かが生物に目的をプログラムしたと素朴に考えられる。心もDNAを用いてディスクリプションすることはできるが、DNAに到達した方法自身が我々の認識の一部であり、そこに限界がある。もっと広い領域で考えなければ、我々が日常感じている問題を解決することは難しい。人間の本来の目的にむかって何をすべきかというのが宗教の基本的考え方で、そこから死への取り組みもでてくる。生存には生き残るという意味だけではなく、生き続けるという意味があり、生存科学が宗教を考える必要もそこにある。また生存は人類だけでなく全生物についてであり、環境問題も、各生物のエコロジカルな相互作用の問題もそこにある。生物は何故他の生物の目的性を断つことでしか生きられないのか。キリスト教で言う「人間は神の特別な恵みを受けて万物を支配する」というのは、「人間は他の生物の世話をしなさい」という意味であると考えられる、と。

* * * *

「生存の哲理」分科会

1. 脳死の定義（社会的事象展開）
辛島恵美子 生存科学研究所研究員
青木 清 上智大学教授

2. 脳死と人の死

医学的立場

永瀬正己 前岡山県医師会長

生物学的立場

久保田 競 京都大学霊長類研究所長

3. 生と死（哲学的立場）

ト部文麿 前兵庫県医師会理事

藤川正徳 図書館情報大学学長

「健康と家庭」分科会

1. 小玉香津子 神奈川県立衛生短期大学教授
2. 小嶋謙四郎 早稲田大学文学部教授
3. 小此木啓吾 慶応大学医学部教授
4. 五十嵐正紘 自治医科大学教授

「医業問題」分科会

長寿社会における医療と医業開発

1. 基調発言

野口照久 サントリー株式会社専務取締役

2. コメンテーターによる討論

総合学術センター設立の視点から

須藤辰夫 三共株式会社専務取締役

経済評価の視点から

藤野志朗 中央大学経済学部教授

老人保健の視点から

豊川裕之 東邦大学医学部教授

「産業環境と生存」分科会

地球環境保護と持続可能な開発に向けて

1. 問題提起と討議領域

向山定孝 三井業際研究所常任委員

2. 産業界の対応

藤森明治 地球産業文化研究所

家永順二 新日本製鉄株式会社

田中正則 林野庁指導部計画課課長

* * * *

各分科会は4会場に別れて開催され、それぞれ参加者を交えた討論と座長の総括があり、最後に全参加者が再び一堂に会し、各座長からの討議報告の後質疑応答が行われた。

第3回家庭問題研究会

1月10日(木)午後6時より第3回「家庭問題」研究会が開催された。小林委員長の司会で、1月20日の生存科学シンポジウム分科会の準備として、発表予定者による発表内容の紹介と参加者による討論が行われた。

まず、看護の本来の意味は病者に対するばかりでなく、一般の人の健康を保持・向上させる(直接医学的処置以外の)行為であり、特にそれは家庭の機能として重視されてきた点が強調されたが、同時にそれがうまく行けば、現在の消費による経済成長と矛盾しないかという疑問や、日本の家庭の機能の将来が悲観的なものではないかという意見が出され、これからの経済の考え方やコミュニティのあり方、新しい家庭像等が議論された。

第3回医薬問題研究会

1月14日(月)午後3時より第3回医薬問題研究会が開催された。今回は、武田薬品工業株式会社専務取締役の山田裕久委員が、疾病の将来予測、医薬品開発の動向と経済面等に関する豊富な資料に基づき、「製薬企業における新薬研究開発について一現状と問題点」と題して発表し、粕谷委員長の司会のもとに参加者の討議が行われた。

次回は3月4日、発表者は中央大学教授の藤野志朗委員の予定。

第1回調整企画会議

調整企画会議は、生存科学研究に関わる基金並びに財団の各研究間の調整と、従来の縦割りの研究や施策の限界を横並びに観ることにより取り扱う方法を探ることを目的とし、それにより研究の総合化と進展を図るもので今回初めて開催された会議である。いままでも色々な研究会のなかで、またはそれに付随して流動的に、そのような努力は常になされ

ていたが、今回はそれを組織的に強化して一層の成果を期待しようという試みである。

会議は2月9日(土)午後2時より4時半迄。場所は研究所会議室。メンバーは以下のとおり。(アイウエオ順・敬称略)

石川英夫：(財)農村開発企画委員会理事

北島邦夫：地方公務員災害補償基金

草野洋一：農林水産省農蚕園芸局

芥木崇人：神戸芸術工科大学環境デザイン学科

椎葉茂樹：労働省安全衛生部科学調査課

塩満典子：科学技術庁大臣官房総務課広報専門官

曾我部捷洋：通産省立地公害局立地指導課長

高橋潤二郎：慶応義塾大学環境情報学部教授

田中正則：林野庁指導部計画課課長

豊川裕之：東邦大学医学部教授

新飯田宏：横浜国立大学経済学部教授

西岡久寿彌：日本赤十字社中央血液センター副所長

西藤 冲：日本総合研究所所長

花田 恭：厚生省人口問題研究所人口統計学研究室長

福渡 靖：順天堂大学医学部教授

松尾泰樹：科学技術庁研究開発局ライフサイエンス課

松田 朗：厚生省健康政策局計画課課長

松本義幸：環境庁大気保全局企画課

深山英房：地球環境産業技術研究組織主席研究員

師岡孝次：東海大学工学部経営工学科教授

矢口光子：(社)農村生活総合研究センター

山本光昭：厚生省大臣官房厚生科学課

会議事務局
小平敦、鈴木雪夫、中山昌作、田村貞雄、事務局補佐：小平 健

会議では、会議の今後のあり方、生存科学のあり方、研究や普及活動の進め方等につき、色々な視点から真剣な討議がなされ、事務局は、それを受けて具体的に取り組むための小委員会を作って検討し、メンバーに図りながら進めることになった。

事業計画会議

1月20日(日)生存科学シンポジウム当日の昼休み、基金・財団各研究グループの責任者により、生存科学研究の平成3年度事業計画作成のための会議が開催された。さらに2月16日(土)には、第2回目の会議が開かれ、より具体的な準備が進められ、引き続いて行われた常務理事会で、3月の基金運営委員会・財団理事会へ提出する原案が、細部は執行部に一任する形で承認された。

平成3年度の事業計画は、これまでの研究体制をさらに強化・整備し、前述の調整企画会議の活動とともに全体の研究が互いに連携しながらより一層総合的な成果を高めることを目指している。

平成3年度武見フェロー選考委員会

1月7日(月)平成3年度ハーバード大学公衆衛生大学院武見記念国際保健講座フェロー(武見フェロー)の第1次選考委員会が開催され、応募者のなかから長崎大学医学部公衆衛生学教室助教授門司和彦氏が選ばれた。氏は東京大学医学部保健学科卒、公衆衛生学、人類生態学等を専攻、インドネシア、ボリビア等各地の保健生態学調査、人類生態学調査に参加している。

第55回生存科学研究会のお知らせ

日時：平成3年3月23日 土曜日
午後2時30分～4時30分
場所：大手町 経団連会館

「医療・経済・生存」シリーズ 最終回
演題 『生存と生命倫理』(仮題)

講師 早稲田大学人間科学部
木村利人教授
今回は第4土曜日です。御注意ください。

ハーバード大学武見講座活動報告 報告者 津谷フェロー

武見所長・松本

- 12/3 Closing the Gaps :Financing and Fees for Health Services in Rwanda / D.Shepard
- 12/10 Steroid Contraceptives and Women's Response / R.Snow
- 12/17 Seven Steps for the Implementation of Essential National Health Research / A.Lucas
- 1/7 Workshop : Cultural Management of Health Research Projects / U.Brinkmann
- 1/9 Globalization on Health / R. Morgan
- 1/28 Behavioral Factors in TB Treatment and Prevention:Research Agenda at the U.S.Centers for Disease Control / E.Sumartojo

楽しく安心して働ける職場作り検討会

1月17日(木)正午から、研究作業と事務作業の緊密な協調化と職員の福利厚生の上をを図るため、研究所職員と役員との会議が開かれ職員の有効配置、事務体制、機器の選択、福利厚生のあり方等が検討された。これは今後も毎月行われる予定。

ニュースVOL5.NO5.掲載の

「組織運営概念図」ならびに

ニュースVOL5.NO6.掲載の

「総合調整委員会」の記事について

上記における「総合調整委員会」は、記事中にもお断わりしましたように、基金・財団の調整や合意形成を図るための会議であり、基金・財団両組織の上位に位する意志決定の場ではありません。基金の信託管理人から御注意がありましたので、あらためてお断わりしておきます。